

不屈の海2

グアム沖空母決戦

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章 不敗態勢

9

第二章 真珠湾の炎

33

第三章 静かなる地中海

65

第四章 「賞金稼バウンティハンターぎ」作戦

105

第五章 一八〇涇カイリの攻防

145

第六章 栄光を継ぐもの

239

180°

150°W

太平洋

30°N

ミッドウェー島

ハワイ諸島

オアフ島

ハワイ島

真珠湾

フレンチフリゲート環礁

ウェーク島

マーシャル諸島

ジョンストン島

クエゼリン環礁

メジュロ環礁

パルミラ島

0°

西部太平洋要図



不屈の海 2

グアム沖空母決戦



第一章 不敗態勢

1

シヤム湾は青玉サファイアを溶かし込んだような色に染まっていた。

夜が明けてから、さほど時間は経っていない。東の水平線付近から陽光ようこうが射し込み、海面では光が乱舞らんぶしている。

軽巡洋艦「名取」の艦体は、ぎらつく陽光にじりじりと炙あぶられ、乗組員はしきりに汗を拭ぬぐっていた。

「正面に陸地」

七時四八分（日本時間。現地時間六時四八分）、見張長はりちようの下田学兵曹長が艦橋かんきように報告を上げた。

「名取」艦長佐々木静吾大佐は、前方に双眼鏡そうがんきょうを向けた。

報告された通り、艦の正面に黒々とした陸地が横たわっている。

「現在、コタバルよりの方位四五度、一二哩カイリです」

航海長の井川直哉少佐が言った。

マレー半島のシヤム湾岸にある、英国の都市だ。

英国とタイの国境付近に位置している。

シンガポールに司令部を置く英国極東陸軍が守備隊を置き、国境と海上の両方に目を光らせているであろうことは容易に想像がつく。

「名取」は一六ノットの速力を維持し、陸地に接近してゆく。

「左四五度に艦影。軽巡らしい！」

下田が、新たな報告を上げた。

「艦長より見張り。国籍を確認せよ」

佐々木は、双眼鏡を左舷前方に向けながら命じた。

全長は「名取」とさほど変わらぬようだ。

艦全体がどこか間延びして見えるのは、艦橋、煙突、後部指揮所といった上部構造物が、互いに離れて配置されているためであろう。

「砲術より艦橋。目標との距離一二〇（二万二〇〇メートル）」

今度は、射撃指揮所から報告が伝えられる。

「名取」が装備する一四センチ単装主砲のうち、左前方に指向可能なのは二基だけだ。

主砲は全て、砲身を水平に倒しているが、射撃指揮所では目標に照準を合わせているはずだ。

佐々木が一言命令すれば、一四センチ主砲は直ちに旋回し、左前方の軽巡に向けて火を噴く。

だが、佐々木の口から「砲撃始め！」の命令は出なかった。

「艦長より砲術。別命あるまで発砲は禁ずる」

「別命あるまで発砲禁止。宜候」

砲術長佐藤俊雄少佐が復唱を返す。

「名取」は軽巡とおぼしき艦との距離を詰めてゆく。

「目標との距離一〇〇」

「砲術より艦橋。発見せる目標はエメラルド級。英国の軽巡です！」

下田見張長と佐藤砲術長の報告が、続けて入った。
「エメラルド級か」

佐々木は、記憶をまさぐった。

先の世界大戦中に計画され、大戦終結後に竣工した軽巡洋艦だ。

旧式化した部分もあるが、昭和一六年現在も第一線に留まり、植民地の警備や船団の護衛に当たっている艦が多い。

兵装は一五・二センチ単装砲七基、一〇・二センチ連装高角砲三基、二ポンド連装ポンポン砲一基、五三・三センチ魚雷発射管三連装四基。

「名取」よりも強力だ。

まともに撃ち合えば、不利は目に見えている。その不利を覆すには、先制の一撃を加え、緒戦で相手の戦闘力を奪うしかないが――。

「砲術、エメラルド級の主砲の向き、仰角報せ」

佐々木は佐藤に新たな命令を発した。

「名取」は主砲の向きを艦の軸線に合わせ、砲身も水平に倒すことで、敵意がないことを示しているが、エメラルド級が同様に振る舞うとは限らない。

英艦が主砲を「名取」に向けていれば、先制の一撃を喰らう公算が高くなる。

「主砲の向きは軸線上、仰角は〇度です」

若干の間を置いて、佐藤が答えた。

「ひとまず、よしか」

佐々木は額の汗を拭った。

エメラルド級も「名取」と同じように振る舞うことで、戦闘の意志がないことを示したのだ。

「名取」とエメラルド級は、互いに沈黙したまま距離を詰めてゆく。

佐々木にも、目標の艦形をはっきりと見分けられるようになっていた。

艦橋の形状は、「名取」よりもがっしりしており、頑丈そうに見える。

煙突は「名取」と同じく三本。

二、三番煙突の間に、後部指揮所とおぼしき構造物が設けられ、三番煙突の後ろに射出機と揚収機が確認できる。

「名取」に比べ、余裕が感じられる艦形だった。

「距離八〇！」

の報告が上げられる。

双眼鏡を使えば、細部までをはっきり見分けられる距離だ。

マストに翻る英国国旗も認められる。

「通信より艦長。英艦より通信。『貴艦ハ英国ノ領海ニ接近シツツアリ。速ヤカニ変針サレタシ』と伝えております」

通信長海野司郎少佐が報告を上げた。

「英艦に返信。『了解。直チニ変針ス』」

「航海、面舵一杯。針路〇度！」

佐々木は海野と井川に指示を与えた。

「面舵一杯。針路〇度！」

井川が、操舵室に指示を送る。

「名取」はしばし直進するが、やがて舵が利き始め、艦首を大きく右に振る。

左前方に見えていたエメラルド級軽巡が視界の外

に消える。

（今砲撃を食らったら、一方的に叩きのめされる）

佐々木は、背筋に冷たいものを感じた。

回頭中の艦は速力が大幅に衰えるため、格好の砲

撃目標になる。

夜間であればまだしも、視界の良好な昼間、八〇

〇メートルという近距離での回頭は、極めて危険な行動なのだ。

エメラルド級の主砲は「名取」を指向していないが、命令があれば、数秒で砲口を向けられる。

——だが、恐れていたことは起こらなかった。

エメラルド級は、黙って「名取」を見送った。

「後部見張りより艦橋。英艦、面舵！」

新たな報告が上げられ、佐々木は安堵の息を漏らした。

エメラルド級軽巡も、現海域より退去した。

二隻の旧式軽巡が、マレー半島コタバルの沖で日英開戦の引き金を引くことはなかったのだ。

「艦長、汗びつしよりですよ」

井川が佐々木にハンカチを渡した。

佐々木は礼を言いつてハンカチを受け取り、顔の汗を拭った。

「いつ火を噴くかと思うと、気が気じゃありませんな」

「向こうの艦長も、そう思っただろう。この場で撃ち合うつもりはないと、互いに分かっているもな」

井川の言葉に、佐々木は答えた。

昭和一六年一二月一四日現在、日本と英国は戦争状態にはない。

一二月一日の独米開戦直後、英国政府は日本政府に接触を図り、水面下での交渉が行われたのだ。

日本は、対英宣戦を布告せず、英国がアジアに保有する植民地——香港、マレー、シンガポール、ビルマ等には一切手を出さない。

その代わり、英国も日本に対する武力行使は行わない。

日本が開戦前から進駐しんちゆうしているフランス領インドシナは元より、英国領以外の極東諸地域——米國領フィリピンやオランダ領東インドに日本が進攻しても黙認もくにんする、という条件を提示したのだ。

一昨年の、ドイツ軍による英本土上陸作戦を辛くも撃退した英国だが、危機は依然いぜん続いている。

ドーバー海峡を挟んだ航空戦はいつ果てるとも知れず、大西洋に大量投入されたUボートは、英本土を孤立こりつさせるべく跳梁ちやうりやうしている。

欧州への反攻作戦など、思いもよらない。

この状況下では、極東の植民地に兵力を派遣はけんする余裕はない。

英国は極東の植民地を守るのに、武力ではなく、外交を用いたのだ。

日本政府はこの条件を呑み、一二月七日、正式に日英不可侵条約が締結された。

日本も、英国も、互いを完全に信用しているわけではない。

日本はタイ王国と協定を結び、本間雅晴中将の第一四軍を同国に駐留させて、英軍の動向監視に当たらせている。

海上兵力では、高橋伊望中将が率いる第三艦隊を仏印に展開させ、万一の事態に備えている。

ただし第三艦隊は、旧式輕巡と驅逐艦、特設水上機母艦等を中心とした二線級の部隊だ。

事情は、英軍も同様だ。

マレー半島、シンガポール、ビルマに駐留する英陸軍は、植民地の治安維持を主任務とする輕裝備の部隊で、タイや仏印に進攻する力は持たない。

シンガポールに駐留する英国東洋艦隊も、旧式輕巡と驅逐艦を中心とした部隊であり、連合艦隊の精銳と真つ向から戦う力はない。

極東における日本と英国は、敵対する關係にありながらも、互いに武力を行使せず、共存する關係にあったのだ。

コタバル沖における「名取」とエメラルド級輕巡

の遭遇も、破局を招くことなく終わつたのだつた。

二隻の輕巡は、互いに反対方向に艦首を向けているため、距離はみるみる開いてゆく。

やがて「名取」の艦橋に、

「英輕巡、視界外に離脱！」

との報告が、後部見張員より上げられた。

2

大英帝国外務大臣アンソニー・イーデンが、アメリカ合衆国國務長官コーデル・ハルトの会談場所に選んだのは、スコットランドのエディンバラだつた。本来なら外務省の大臣室に招くところだが、ロンドンに対するドイツ軍の空襲は恒常的に続いているため、危険と判断されたのだ。

今年の一二月一日以前であれば、「アメリカの國務長官が訪英する」とのニュースを流せば、ドイツも空襲を控えたかもしれない。

だが、アメリカは今や交戦国となつている。

ドイツがアメリカの國務長官に遠慮するはずがなかった。

バルモラル・ホテルの貴賓室に通されたハルは、

硬い表情を浮かべていた。

古城のような外觀を持ち、エディンバラに数あるホテルの中でも伝統と格式を誇るが、そのような最高級ホテルに案内されたことを喜んでゐる様子はない。

歓迎している振りを装つても、ごまかされはしない、と告げようとしているかに見えた。

イーデンが差し出した右手を、ハルはむつとりとした表情のまま握り返した。

力のこもらぬ握り方であり、儀礼的に応じただけのようなふたつた。

「私が自ら貴国に足を運んだ理由については、既にお分かりでしょう」

ハルは、いきなり本題に入つた。

儀礼的な挨拶などは、一切ない。先の握手だけで充分だ、と考えている様子だった。

「本来なら、貴国との交渉はワイナント（ジヨセフ・ワイナント。駐英米国大使）に任せるところですが、ことは重大です。貴国の振る舞いは、合衆国に対する背信であり、同盟関係に亀裂を入れかねない行爲です」

イーデンは、すぐには発言しなかった。

お続け下さい、と促した。

「率直に伺います。貴国は、ドイツとのみ戦われるおつもりですか？ 日本に対しては宣戦を布告せず、極東で軍事行動を起こすつもりもないということですか？」

「おっしゃる通りです、ミスター・ハル。——あくまで今のところは、ですが」

イーデンは、重々しい口調で答えた。

「日本は、ドイツの同盟国です。ドイツが、我が国と貴国の共通の敵であるように、日本もまた敵国な

のです。その敵国との戦いを、我が国にだけ委ねるということですか？」

「日本に仕掛けたのは貴国でしよう。米独開戦については、ドイツのUボートが貴国の船団を攻撃したという立派な理由がありました。貴国はドイツの挑戦を受けた立場なのだ、と」

「我が国に、繰り返し対独参戦を求めて来た貴国が、それを言うのですか？ 貴国は何度も合衆国の参戦を懇願して来たため、我が国は対独参戦の機会を作ろうと、手段を尽くしてきたのですぞ」

「無論、貴国の参戦につきましては深く感謝しております。ですが、ドイツと日本は同盟関係にあるとはいえ、地理的には遠く離れており、政治的な立場も異なります。対独政策と対日政策は、個別かつ柔軟に考えたいのです」

「対日戦争は合衆国に全てを委ねるといのが、貴官の言う柔軟な考えなのですか？」

「四国の宿毛湾で、日本軍の新鋭戦艦を撃沈したい

きさつは、我が国も存じておりますぞ。貴国は宣戦布告の手續きを経ることなく、日本に先制攻撃を加えたではありませんか」

「二月六日の時点で、日本は既に軍事行動を起こしております。彼らは二月七日を期してハワイを攻撃すべく、有力な艦隊を同地に接近させていたのです。先に仕掛けて来たのは、日本の方です」

「艦隊をハワイに接近させていたと言いましても、あくまで公海上での行動です。また、現実には戦争の口火を切ったのは貴国です」

「スクモ・ベイにおける日本戦艦の撃沈は、戦争行為ではなく、『武力を用いた警告』です。日本がドイツ、イタリアとの同盟関係を破棄し、フランス領インドシナから撤退すれば、我が国は日本に宣戦せず、沈めた戦艦について賠償する用意もありました。ところが日本は、ハワイを——れっきとした合衆国の領土を攻撃して来たのです。それだけではありません。日本は既に、フィリピン、グアム、ウェ

ークで軍事行動を起こしております。事ここに至つては、合衆国は日本と全面対決せざるを得ません」
「五〇年にも亘る公職生活を経験された方のお言葉とは思えませんな」

イーデンは、ゆつくりとかぶりを振った。

「『武力を用いた警告』という貴国の主張を、日本が受け容れるとは限りません。同じ事象であつても、国が異なれば解釈も異なるというのは、外交の根本原則です」

「先ほどからうかがっていますと、貴国は合衆国よりも日本の味方をしているように聞こえますが」
ハルの表情が陰しくなった。

イギリスの同盟国はアメリカなのか、それとも日本なのか、と問いたげだった。

「貴国を大切な同盟国だと考えているからこそ、事実を客観的に認識するよう努めているのです。時系列上は、貴国の武力行使、日本の対米宣戦布告、日本のハワイ攻撃の順になります。この事実は動かせ

ませんぞ」

「対日戦争で、先制攻撃を加えたのは我が合衆国である。それ故、イギリスは対日参戦の必要性を認めない。それが、貴国の考えですか？」

「建前上は、貴官のおっしゃる通りです」

イーデンは会談を始めてから、ずっと引き締めていた表情を崩した。

今から、本音を話します——との合図を送ったつもりだった。

「率直に申し上げまして、我が大英帝国がドイツと日本の二国を相手取るのは困難なのです。仮に我が国が対日宣戦を布告した場合、日本は我が国の極東領を占領しようとかかつて来るでしょう。我が国には、極東領に増援を送るだけの余裕がありません。日本軍が侵攻して来れば、陥落することは目に見えています」

「貴国は本土に上陸したドイツ軍部隊の撃退に成功し、その後は上陸を許していません。極東領に兵力

を派遣する余裕はあると考えますが」

「ドイツ軍の上陸を許し、本土の一部を四ヶ月に亘って占領されたことが、国民の心に大きな傷を残したのです。フェリペ二世のスペイン軍にも、ナポレオンのフランス軍にも為し得なかった本土への上陸を、ドイツ軍に許してしまったのですから。以来、政府でも、国民世論でも、本土防衛を最優先にすべきだ、との意見が多数派となっています。植民地の防衛に回す兵力があるなら本土の防衛に使用すべきだ、との意見が」

「確かに、イギリス国民の恐怖は相当なものだったでしょうな」

ハルが、幾分か態度を和らげたように見えた。

顔には、同情の色がほの見える。

昨年のイギリスと同様の事態がアメリカ本土で起きたら、国民はどう思うか、と想像したのかもしれない。

「だからといって、極東の植民地を手放すことはで

きません。香港も、シンガポールも、ビルマも、我が大英帝国を支える重要な柱なのです」

「それ故、日本と不可侵条約を結んだのですか？ 軍事力による極東の植民地防衛が不可能であるため、外交によって守ろう、と」

「おっしゃる通りです」

「エゴイズムです、それは」

ハルの表情に、輕蔑の色が浮かんだ。

「我が国も極東にフィリピンを領有していますが、同地の安全と引き替えに日本と宥和する道は選んでいません。オランダも同様です」

「貴国にせよ、オランダにせよ、個々の事情に応じ、対日政策を決定したものと理解しております。我が大英帝国もまた、自国の事情によって、日本と不可侵条約を結んだまでです」

「自国さえ安泰ならよいということですか？」

「大英帝国としては、まず自国を守らねばなりません。本土も、極東植民地も、失うわけにはゆかぬの

です」

「貴国がそのような態度を取られるのであれば、合衆国としても、貴国との同盟関係を考え直す必要はなりません……」

「今の時点で、それが可能ですか？」

イーデンの問いに、ハルはしばし沈黙した。

去る一月二八日、PL22船団がUボートの攻撃を受けたことをきっかけに合衆国が対独参戦したとき、アメリカ合衆国大統領フランクリン・デラノ・ルーズベルトは、

「これは第二のルシタニア号事件である」

「ドイツのような無法国家を放置しておくことは、世界正義の観点からも許されない」

「ドイツを放置しておけば、我々はいずれ大西洋を失う。合衆国は国民のため、そして我々の子供たちのために、脅威を除かなければならない」

等の言葉を議会で述べ、「ドイツ打倒」を世界に向かつて宣言したのだ。

今、それを撤回すれば、アメリカは臆病国家の烙印を押され、世界中から嘲笑を浴びることになる。

そうなれば、アメリカの国際的地位は著しく下落することになる。

「好むと好まざるとに関わらず、合衆国は貴国と共に、ドイツ打倒のため戦わねばならない、ということですか」

「我が国が貴国に参戦を懇願したにせよ、最終的に対独参戦の道を選んだのは貴国自身です」

ハルの口が、微妙に動いた。

言葉が発せられることはなかったが、呪詛の言葉を呟いたのであることは想像がついた。

「貴国の対日参戦は望めぬということですか？」

今一度、確認を求めたハルに、イーデンは答えた。

「時至れば、とお答えします」

「時、とは具体的にいつです？」

「我が国と貴国がドイツを打倒した時に」

ハルは深々と溜息をついた。

「その頃には、合衆国が日本を打倒しているでしょうな」

「そのときは、それで構いません。我が国は、日本打倒については一切報酬を求めません」

「極東の植民地さえ維持できればよい、と？」

「左様です」

「ゼアース・ナッシング・フォー・イット
致し方がありません」

ハルは肩を竦めた。

口から吐き出された言葉は、日本の外務大臣東郷重徳が、駐日アメリカ大使ジョセフ・グルーに言ったものと一言一句同じだったが、この時点でハルがそのことを知る由もなかった。

「日本は、我が合衆国が単独で屈服させて御覧に入れましょう」

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。